由紀と香織の辛い日

ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
由紀と香織の辛い日

【Ｎコード】
Ｎ４６３６ＢＵ

【作者名】
ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
私といえば小説のほとんどが割礼もの。今回は中学３年生の由紀と香織がクリトリスを削り落とされてしまう話です。

暗い待合室。もうすぐ5月だというのに病院の廊下には冷たいすきま風が吹き込んでいた。学校の上下ジャージを着こんだ小林由紀は暗い顔をしてうつむいていた。時折、隣に座っている母の顔を見上げる。娘の哀願を突き放すかのような厳しい表情の母は持参した小説を読み続けていた。突然、隣の手術室から歯医者でよく耳にするドリルのような機械音が聞こえてきた。焦げるような臭いもただよってきた。全身をこわばらせた由紀の耳に、井上香織の悲鳴が聞こえてきた。「痛い痛いーママーごめんなさいー」などと叫んでいるようだが言葉にならない。それを聞いた由紀の目に大粒の涙が浮かび、廊下へ落ちた。その姿を隣で目にしながら、母は全く表情を変えない。

壁を越えたところにある手術室では下半身裸の香織が両手両足を固定され、今まさに女性として一番要の部分を破壊されているところである。叫び声が続いたと思うと一瞬収まり、また火がついたように泣き叫ぶ。由紀も他人を気遣っている余裕はない、香織の処置が終われば次は自分の順番である。

同じ団地に住み、小学校の時から中が良い由紀と香織がこのような仕打ちを受けている理由は2週間前にさかのぼる。中学3年になった2人はこれから始まる受験勉強の息抜きに、友人の兄たちとドライブへ出かけた。塾で知り合った友人の兄は大学生で、香織と密かにおつきあいをしていた。それを聞いた由紀も年上の男性と近づきたいと願い、更に友人を紹介して貰った。かくして大学生の男子2人と中3女子は1台の車に乗り込み、海岸線をドライブした。道中で由紀も意気投合し、2組のカップルがは車内デートを楽しんだ。塾の授業がなかったこの日、二人は自習室で勉強をするといって家を出て夕食までには帰るつもりでいた。しかし楽しい時間はつい過

ぎていき、運転技術のまずさもあって時間が過ぎてしまった。なかなか帰らない娘を心配した由紀の母が塾に電話をいれたことから二人のウソが発覚した。

塾に行くとウソをついてさぼっていたこと、しかも男子学生といちゃいちゃして車中キスまでしたことに二人の両親は激怒した。これから高校受験生、本腰を入れて頑張らなければいけない時に異性への関心を持つなど言語道断だと言い放った。そして親同士話し合いの結果、二人にはきつい仕打ちが与えられることになった。由紀は父親から血が出るほどのビンタを受け、香織は憧れていたアイドルグループのCDやポスターを全て処分された。しかしその程度で済まされなかった。

20年、歯科用のドリルを改良した新たな医療器具が開発された。これは女性のクリトリスを削るための道具である。時代が変わり、女性が積極的に性欲を持つことは慎むべきとの風潮が高まった。自慰行為は有害であるとハッキリ宣言され、未成年の性行為は法律で取り締まられた。未成年の異性がキスをするだけで補導の対象となり、街中で手をつないで歩くことにさえ厳しい目が向けられるようになった。そんな中でこの医療器具は作られた。鋭い歯が超高速で回転することによりクリトリスの海綿体組織を、粉々に砕いてしまうのだ。

成人女性については自身の希望があればクリトリスを除去する手術を受けることが出来る。しかし自ら性感を手放す者などまずいない。高校生以上の未成年は親の承諾があれば本人の意思を問わず手術が可能となる。性感を不要と思う親たちによって、躾の厳しい家

庭の少女たちは次々クリトリスを奪われたものだ。そして中学生については①発毛していること②初潮を迎えて1年以上を経過していることを条件に、親の希望があれば陰部の検査を受けた上で手術は可能となっていた。膣が成長する前に性感を全て奪ってしまうと今後の発育に影響を及ぼし難産になる恐れがあるからだ。ある程度性的に成長している場合、親から特別な要望があれば手術を受けられる。

由紀と香織は①②の条件は既に満たしていたことから両親は病院へと二人を連行した。もちろん泣いて許しを請うた二人であるが、どちらの親も一切叙情酌量の余地を見せなかった。これだけのことをしたのであるから当然の処置だと考えていた。そして先程、二人は処置室に並んで下半身裸にされ、看護師から陰毛をすべて剃られてしまった。その上で男性医師が二人の股間を広げ、陰唇の発育具合を調べる。更に膣の中へ器具を挿入し、発育に問題がないかどうかを調べた。二人は恥ずかしいし痛いしくすぐったいしで泣き続けていた。

診察した医師は、二人の陰部を発育良好と判断した。これで手術ができる条件は揃った。予め用意してきた書類に由紀の母も香織の母も必要事項を記入し、最後に捺印した。書類が完成するまでわずか5分、この間も泣いて哀願する娘の心境はまったく考慮しなかった。捺印が済んだところで手術が決定し、二人は浣腸を施された。術前に腸内のものは全てはき出しておく必要がある。手術は名前の順で行うので小林由紀は一度ジャージの下を着用するよう命じられた。井上香織は上半身のジャージも脱がされ、丈の短い緑色の手術着を着用させられ、手術室へと連行されていった。

手術室のドアが開き、股間にテーピングをあてがわれた香織がストレッチャーに乗せられたまま室外に出てきた。あのテーピングの奥には、ついさっきまでクリトリスがあったはずである。下腹部や足の上には毛布がかけられ、ちょうど浮き彫りになった股間だけが痛々しかった。精根尽き果ててぐったりしている香織であるが、由紀とすれ違う時だけは互いに手を握り、苦痛を共有した。香織は母が待つ病室へ移動し、しばらくの間休憩する。そして待つこと5分、遂に由紀が室内へ呼ばれた。

その場でジャージの上下を脱ぎ、丈の短い手術着に着替えるよう命じられた。もうここまできたら覚悟を決めるしかない。壁をむいてジャージとブラを脱ぎ、手術着を身につけた。そしてズボンとパンツを脱ぎ、なるべく丈をのばして股間を隠した。先程そり落とされた陰毛の跡が痛々しい。看護師に導かれ、手術台の上に乗った。なるべく足を閉じて股間を隠そうとしたが、すぐに両足を大きく広げられたまま固定されてしまった。更に両方の手首にゴムがまきつけられ、頭の上で組まれた。下半身をさらけ出したまま、由紀は全身を固定されてしまい、もう動けない。手術用のスポットライトが股間を照らし、準備は整った。

先程の医師が現れ、両手で由紀の陰唇を開いた。そしてクリトリスの包皮を慎重に剥くとそのままの状態で固定した。更に右手にドリルのような道具を持ち、電動スイッチをいれた。焦げ付くような臭いが手術室に充満する。高速で歯が回転する音が由紀の恐怖を駆り立てる。怖くて目を閉じた由紀の股間に、次の瞬間激痛が走った。ついに器具がクリトリスにあてられたのであった。この道具にかかればクリトリスのような小さな突起は僅かな時間で破壊されてしま

う。野獣のように声をあげて泣き叫ぶ由紀に動揺することもなく医師は淡々と無言で作業を進めていく。クリトリス本体も、それを包む皮も、そして小陰唇の一部までもが削がれていく。ある程度削いだところで医師はよくしみる生理食塩水で消毒を施した。一度は泣き疲れた由紀が再び狂ったような叫び声をあげる。一度綺麗にした後、医師はハンドメスを持ち細かい残り部分を切り落とした。更に消毒を施された由紀は生きている心地がしなかった。最後に看護師は慣れた手つきで止血の作業を行い、まだ血が噴き出してくる股間にテープを貼り、しっかりと固定した。

これから香織が待つ病室へ移動し、しばらく休憩となる。5月の大型連休で今週は塾も休みである。今夜は一晩病院に泊まることになっていた。夜は数時間ごとにガーゼを取り替え、消毒を受けなければならない。この処置がまた激痛であった。朝から絶食していたが、夜になればトイレにも行きたくなる。これからしばらくの間、トイレに行くたびに激痛を味わうことになるのだ。今夜、二人だけで過ごせることが心も体も傷ついた由紀と香織には、ただ一つの喜びである。二人は互いのことを気遣い、激痛を共有しながら、病院での一晩を過ごすことになった。